

「オスプレイも原発情報も隠される！？」

市民集会の開催

憲法委員会 委員長 小野原 聡 史

1 秘密保全法市民集会開催の目的と内容

憲法委員会では、秘密保全法制の危険性と問題点を市民に問いかける市民集会「オスプレイも原発情報も隠される！？」を企画し、本年10月25日午後6時30分より和歌山市民会館市民ホールにおいて、和歌山弁護士会主催で開催しました。

秘密保全法制については、昨年8月8日に秘密保全のための法制の在り方に関する有識者会議から政府に報告書が提出されました。

その後、野田内閣が本年の通常国会に法案を提出するとしてきましたが、結局法案も示されず、2012年通常国会には提出されませんでした。

しかしながら、前原誠司民主党政調会長が本年7月12日〔日本時間13日〕にワシントン市内で講演し、秘密保全法制の早期成立を目指す方針を表明しているように、アメリカに対する公約となっているため、今後の国会での提出が危惧されています。

そして、民主党、自民党などがその必要性について一致していることから、その危険性について国民的な議論を早急に作り出す必要があるため、この企画を実施したものです。

この時期は、臨時国会において秘密保全法制が問題となるであろう時期と考えて設定しましたが、臨時国会開催が遅れたため、国会開会直前の企画となりました。

和歌山弁護士会では、この問題について、本年7月12日に会長声明も出しておりますが、その内容を広く市民に知っていただくこともこの企画の1つの目的です。

さて、憲法委員会には、和歌山弁護士会の劇作家の由良登信会員もいることから、ぜひ市民にわかりやすい寸劇を行おうということになり、市民集会は寸劇、基調報告、パネルディスカッションの3部構成とすることにしました。

2 開催までの準備

憲法委員会では、8月の委員会で企画書を確定し、9月常議員会で承認されたことから、チラシの作成、パネラーの依頼を進め、9月末にはチラシを作成しました。

しかしながら、チラシ入稿の段階では、反原発運動などを行っている市民、特に小さな子どもさんを持った母親のパネラーが決まらず、4人のパネラーのうちの3人の名前だけしか記載できませんでした。

結局4人目のパネラーはチラシの印刷中に決まり、当日は4人のパネラーでのパネルディスカッションを実施することができました。

チラシについては、会員への配布の他、私の個人的な付き合いのある労働組合や市民団体に配布をお願いし、さらに何人かの会員には付き合いのある団体への配布をお願いする

と共に、10月12日には反貧困キャンペーンの一環となる市民集會が開かれましたので、その場でも配布をお願いしました。

さらに、10月17日には、第二次和歌山地域司法計画完成の市民集會の記者会見が予定されていたので、この集會の記者会見も同時に行いました。

しかし、いつものことではありますが、市民への広報手段に限られるため、前日の委員会ではどれだけ来てもらえるか危惧する声も聞こえました。

なお、寸劇の出演者については、10月中に2回練習を行い、小道具なども用意して当日に臨みました。

パネラーについても、コーディネーターを務める由良登信会員が事前に各パネラーと打ち合わせをし、準備を整えました。

3 当日の準備

当日は、午後6時30分の開會に向けて、委員とパネラーは4時30分に集合し、寸劇の最終リハーサルとパネルディスカッションの打ち合わせを行いました。

しかし、ここで問題が発生しました。

我が委員会の人材不足のため、由良登信会員が寸劇の監督とパネルディスカッションのコーディネーターを兼任していたため、寸劇のリハーサルとパネルディスカッションの打ち合わせを並行して行うことが難しくなったのです。

結局、寸劇のリハーサルの方は監督抜きで行い、細かいチェックを自分たちでああでもないこうでもないという騒ぎながら進めて行きました。

寸劇のリハーサルの2回目が終わったときには、開場のわずか6分前という神業で準備

を整えることができました。

4 さて開會

参加者が少ないだろうと考えて、会場の椅子は1列8人で8列用意しました。

6時を過ぎても参加者はぼつりぼつりという感じで心配しましたが、開會直前から開會後にも参加者が増え、最後には椅子を4～5列増やし、結局参加者は約100名という委員会の予想を超える人数となり、委員一同ほっとしたものです。

市民集會は阪本康文会長の開會あいさつで始まりしました。

阪本会長は、最新情報として、すでに秘密保全法制の法案が完成していることを紹介し、10月29日に開會する臨時国会に上程される危険性が高いことを指摘し、また、報告書の内容とその危険性について説明してあいさつを終えました。

次に岸本周平衆議院議員より送られたメッセージが紹介され、いよいよ練習に練習を重ねてきた寸劇「秘密保全法が通ったある日…」が始まりました。

寸劇の第1幕は内閣総理大臣室の場面です。

いかにも高級そうな机を前に、これまた高級そうな椅子にふんぞり返った木村義人首相が、扇子を手に暇そうにしており、その左手の机を前に若くて優秀そうな窪川亮輔秘書官が座っています。

そこに、南方健幸官房長官があわてふためいて入ってきて、オスプレイが1機行方不明となったことを告げ、すったもんだのあげくにオスプレイの情報を特別秘密に指定します。

次に秘書官の机の電話が鳴り、松本雅博原

子力規制委員会委員長が入室の許可を得て入室します。

松本委員長は、南方官房長官と正反対に学者然として落ち着いた表情で原発の原子炉直下に活断層が見つかり、震度6弱でも原子炉破壊の危険性があることを告げますが、首相は今度は落ち着いて、活断層の存在を特別秘密に指定します。

松本委員長が退場すると、窪川秘書官の携帯電話が鳴り、電話を受けた窪川秘書官はにやけた表情で今夜6時の待ち合わせを約束します。

第1幕はここで終わり、首相の机と秘書官の机が合体されて喫茶店の机となり、その前で窪川秘書官が人待ち顔で待っている場面から第2幕が始まります。

窪川秘書官の待ち合わせ相手は、毎朝新聞の記者となっている高校の同級生、美人で窪川秘書官のあこがれの人であった河合佑香記者でした。

2人の話は活断層の話となり、「教えてくれたら今度は2人だけの部屋で会ってもいいよ」という河合記者の言葉に鼻の下を伸ばした窪川秘書官は、ついに秘密を漏洩します。

そこに警官2人が入ってきて、適正評価制度で女性に弱いと判断された窪川秘書官が女性と会うときはマークするようにしていた、今の2人の会話はアウトであると告げられ、国民への情報提供は大事だ、取材の自由の侵害だ、知る権利はどうなると正論を述べる2人は手錠をかけられて連行されるという場面で終わりました。

今度は2人だけの部屋の発言など何力所で会場からは笑いが起こるなど、寸劇は観衆の心をつかんだようで、拍手のうちに寸劇は終わりました。

第2部は、私が基調講演を行いました。

資料としては日弁連作成の「あなたも『秘密保全法』に狙われるQ&A」パンフレット、和歌山弁護士会会長声明、報告書別表「主要な情報漏えい事件の概要」を配布しましたので、これまでの経過や危険性を報告しようとしたのですが、会長声明についてはすでに会長あいさつで詳しく説明されてしまい、さらに、用意したレジュメも見つからないなどどたばたした中で約15分の報告をしましたが、他の弁護士に聞くとまとまっていたという話でしたのでほっとしました。

第3部は約10分の休憩の後、パネルディスカッションが行われました。

コーディネーターは由良登信会員、パネラーは湯浅友美さん（放射能から命を守りたい集いin和歌山）、新土居仁昌さん（毎日新聞和歌山支局長）、小西博久さん（元県警幹部）と和歌山弁護士会副会長の山崎和成弁護士という顔ぶれです。

最初に湯浅さんから、福島第一原発事故で放射能の情報が隠されていて政府の発表が信用できないという国民の気持ちを代弁した発言があり、新土居さんからは報道機関は正確、迅速な報道が命であり、それは何よりも国民のためであるという話、小西さんからは和歌山も訓練飛行ルートになっているのにオスプレイの情報が全く知らされておらず、警察情報も国民に必要な情報ならできるだけ開示すべきと考えていることなどの話がありました。

山崎副会長は、憲法上の知る権利の重要性和、情報は国民のものであるということ、表現の自由など精神的自由は民主主義の基盤であるとの話をしました。

その後、特別秘密の範囲というテーマで、

新土居さんからはかつて沖縄返還をめぐる密約の情報漏洩が問題となった毎日新聞の西山記者事件が紹介され、どのような情報が開示されるべきか、特別秘密の基準をどうすべきかなどのお話がありました。

さらに、共謀や独立教唆の問題点、適正評価制度の問題点についてパネラーからそれぞれ発言があり、予定時間をオーバーしてしまって会場質問が受けられないことになってしまいました。

しかも、由良登信コーディネーターが、それではこれで終わりますという発言で締めくくったのが全体の集会の終了と受け取られてしまい、私の閉会あいさつの前に半数ほどの人が帰ってしまうというどたばたの中、市民集会が終了しました。

5 市民集会を終えて

予想外の人数の参加があったことは喜ばしいことですが、秘密保全法制という言葉自体が市民の中にはまだまだ知らされていません。

今後さらに秘密保全法制という問題の存在やその危険性を市民に知らせていく必要があります。

なお、京都弁護士会も秘密保全法制の市民集会を予定しているようで、和歌山の寸劇のシナリオを送ってほしいという要請があり、送るようにしました。

ちなみに、和歌山のシナリオも、大阪のシナリオを参考にしたものです。

